

Japan International Cooperation in Ophthalmology
Annual Report

日本眼科国際医療協力会議
年次報告書 2018



Santen

A Clear Vision For Life™



すべては目の健康のために

参天製薬は眼科医療の可能性を探求し続けます

世界中の患者さんへのより良い治療に向けて、眼科領域のスペシャリティ・カンパニーとして眼科医療の発展に力を注ぎます。

参天製薬株式会社

大阪市北区大深町 4-20
TEL 06-6321-7000
www.santen.co.jp

日本眼科国際医療協力会議

理事長 藤島 浩



ご挨拶

日本眼科国際協力会議（JICO）は、2009年に発足し、各国で活動をしている8つの日本の眼科団体を支援するため、また、国内の白内障手術の若手医師教育の活動を鋭意行っています。失明予防および治療は日本でも重要な眼科医のテーマですが、発展途上国では貧困や医療システムの不備により、国民が十分な眼科医療や診察を受けられない国が数多く存在しております。このようなアジア、アフリカの国々で、視力を失っている方々に、適切な診療、治療機器、手術、そして教育を提供することにより、一人でも多くの方々に視力を回復していただきたいと考えております。既に、日本眼科医療機器協会の協力のもとに、ホームページ上に中古の医療機器情報を掲載し、各団体からの要望にマッチした医療機器を現場に供給するシステムが動いております。国際協力にご理解がある会社や医療法人も増えてきました。また、人工レンズや粘弾性物質と点眼薬などについてもご提供をいただき、特にAlcon株式会社には、各団体に様々な協力をいただき、誠に感謝しています。今年は海外からの眼科医療研修生の受け入れ、およびその国内での実習援助を開始しますが、徳島大学内藤教授を中心に国内のみならず、

ネパールでも白内障技術講習以外を行っております。大変な過酷な日程ですが、皆さん頑張っておられます。発足当初から始めた眼科学会などでは、医師のみならず看護師、医療機器関係者など、様々な方の医療援助に関する発表を行って、国際協力の今後の課題や抱負が明らかになってきています。今後、JICO海外医療協力について報告を国内の学会活動を介して、世界の援助団体と連絡が取れて、より活発な海外援助活動が出来ることを期待しています。

国際医療援助を行うにあたり3つの問題とお願いがあります。1つは資金であり、2つ目は人的パワーであり、3つ目は時間的な問題です。資金はご理解いただける方の協力が不可欠であり、人的パワーには熱意と新しい力が必要です。そして時間的な問題としては、こういった行為への国内での協力が無いとなしえませんが、以上の内容を基に、実践的な活動について研究し、その研究成果を効果的な運用等に役立てることも目的としています。その為には、皆様の温かい援助と、開発途上国で目が見えなくて苦しんでいる人への思いやりを期待しております。どうぞ、今後ともJICOを宜しくお願いします。

【役員紹介】（敬称略）

理事長 藤島 浩
副理事長 飽浦淳介、服部匡志
監 事 塩田 洋
参 与 吉田統彦

【加入団体】（敬称略・50音順）

団体名 特定非営利活動法人 アジア眼科医療協力会 代表者：黒田真一郎

Association for Ophthalmic Cooperation in Asia（略称：AOCA）

▶ URL: <http://www.aoca.jp/>

特定非営利活動法人 アジア失明予防の会 代表者：服部匡志

Asia Prevention of Blindness Association（略称：APBA）

▶ URL: <http://www.asia-assist.or.jp/>

アフリカ眼科医療を支援する会 代表者：内藤 毅

Association for Ophthalmic Support in Africa（略称：AOSA）

▶ URL: <http://aosa-eye.org/>

タンザニア眼科支援チーム 代表者：山崎 俊

Japan Tanzania Eye Medical Support Team（略称：JTEMST）

▶ URL: <http://www.jtemst.com/>

特定非営利活動法人 ファイトフォービジョン 代表者：藤島 浩

Fight for vision（略称：FFV）

▶ URL: <http://www.ffv.jp/#>

特定非営利活動法人 Project Operation Sight for All（略称：POSA）代表者：倉富彰秀

▶ URL: <http://www.posaoffice.net/>

ライオンズクラブ国際協会332-C地区・眼鏡リサイクルセンター 代表者：山口克宏

ヒマラヤ眼科耳鼻科医療を支援する会 代表者：松山加耶子

▶ URL: <http://earthkaya.web.fc2.com/index.html>

会計報告

日本眼科国際医療協力会議 財務諸表

自：2018年1月1日 至：2018年12月31日 第11期

収支計算書

| 科目 | 金額 |
|-------------|-----------|
| I 経常収支の部 | |
| 1 寄付・助成金収入 | |
| 寄付・助成金収入 | 247,000 |
| 2 会費収入 | |
| 会費収入 | 300,000 |
| 3 広告収入 | |
| 広告収入 | 170,000 |
| 4 雑収入 | |
| 受取利息 | 14 |
| 雑収入 | 25,000 |
| 経常収入合計 | 742,014 |
| II 経常支出の部 | |
| 活動費 | 200,000 |
| 会議費 | 24,744 |
| 通信費 | 18,375 |
| 消耗品費 | 0 |
| 印刷費 | 189,000 |
| 地代家賃 | 0 |
| ホームページ費 | 19,440 |
| 支払手数料 | 1,586 |
| 旅費交通費 | 0 |
| 事務委託費 | 259,200 |
| 租税公課 | 0 |
| 経常支出合計 | 712,345 |
| 経常収支差額 | 29,669 |
| 当期経常増減額 | 29,669 |
| 当期一般正味財産増減額 | 29,669 |
| 一般正味財産期首残高 | 1,741,742 |
| 一般正味財産期末残高 | 1,771,411 |

貸借対照表

| 科目 | 金額 |
|------------|-----------|
| I 資産の部 | |
| 1 流動資産 | |
| 現金 | 328 |
| 普通預金 | 1,771,083 |
| 郵便預金 | 0 |
| 流動資産合計 | 1,771,411 |
| 2 固定資産 | |
| 固定資産合計 | 0 |
| 資産の部合計 | 1,771,411 |
| II 負債の部 | |
| 1 流動負債 | |
| 流動負債合計 | 0 |
| 負債の部合計 | 0 |
| III 正味財産の部 | |
| 一般正味財産 | 1,771,411 |
| 正味財産合計 | 1,771,411 |
| 負債及び正味財産合計 | 1,771,411 |

財産目録

| 科目・摘要 | 金額 |
|-------------------|-----------|
| I 資産の部 | |
| 1 流動資産 | |
| 現金 | 328 |
| 普通預金 三井住友銀行高田馬場支店 | 1,771,083 |
| 普通預金 ゆうちょ銀行 | 0 |
| 未収入金 | 0 |
| 2 固定資産 | 0 |
| 資産の部合計 | 1,771,411 |
| II 負債の部 | |
| 1 流動負債 | 0 |
| 負債合計 | 0 |
| 正味財産 | 1,771,411 |

JICO 今後の活動について 2018

- 1：日本眼科医療機器協会の協力のもとに、ホームページ上に中古の医療機器情報が掲載されています。また機器が寄贈された場合に、その後の搬送から梱包までは日本眼科医療機器協会と機器の会社が援助してくれています。過去には JINS 眼鏡から術後の予防のためにサングラスの寄贈を受け、アジア、アフリカで活動中の団体を通じて患者様に配られました。また、千寿製薬からは粘弾性物質を寄贈してもらい、ベトナムでの無料白内障手術に使わせていただきました。今後は中古品に限らず、新品も国内で購入し、JICO が援助する方式にしたいと思っています。現在も梱包された白内障手術機器が船便での搬送を待っています。
- 2：海外での眼科医療現状を目の当たりに見る事は若い研修生にとっては非常に重要だと思います。一方、海外からの眼科医療研修生の受け入れも、その国の眼科医療の独立性を図るためにも大事な仕事です。徳島大学の内藤先生らは大学でこういった受け入れと教育を行っています。今後は眼科学会や眼科医会のみならず、医療機器メーカーや製薬会社とも相談してこのような試みを実行出来るような基金をはじめとしたシステムを構築したいと思っています。
- 3：定期的に眼科の学会でシンポジウムなどが出来るようになりました。今後はさらに医師のみならず看護師、医療機器関係者など、様々な方の医療援助に関する関心を持ってもらえるように、色んな学会でシンポジウムなどの発表を行って、国際協力へのマンパワーを充実させていきたいと思っています。
- 4：海外協力を行っている手術技術を若い日本の先生の為に白内障手術講習会を JICO も協力し近年には FFV の若手医師がアジア失明予防の会と一緒にベトナムで無料白内障手術に参加しました。今後さらに充実した研修が出来るように、各団体とも連絡を取って行きたいと思っています。
- 5：活動の中心は事務局になると思いますが、資金の運用などをスムーズにしていきたいと思っています。

冒頭にも申しましたように、国際医療援助を行うにあたり 3つの問題があります。資金、人的パワー、時間という問題は、こういった活動の一番の問題になります。特に資金が無いと何も行動できません。JICO は実践的な活動について研究し、その研究成果を効果的な運用等に役立て、結果として活動をサポートすることをメインに考えています。皆様の温かい援助と、御協力を期待しております。

今後の活動スケジュール

JICO 2019 年 各団体年間スケジュール 団体名 50 音順

| No. | 団体名 | 代表者名 (敬称略) | 年間スケジュール (予定) | |
|-----|--|------------|---------------|--|
| 1 | アジア眼科医療協力会 (AOCA) | 黒田 真一郎 | 1/26 | アイキャンブ報告会 大阪聖パウロ教会 |
| | | | 3/23 | 西宮市の NPO フェスティバルにてバザー開催 |
| | | | 6/8 | AOCA 総会 千寿製薬株式会社 会議室 (予定) |
| | | | 12 月下旬 | 北西インド・ダラムサラ アイキャンブ 南インド・バイラクuppe アイキャンブ |
| 2 | アジア失明予防の会 (APBA) | 服部 匡志 | 11 月 | ベトナム |
| 3 | アフリカ眼科医療を支援する会 (AOSA) | 内藤 毅 | 6/11 ~ 20 | モザンビーク南部の Gaza 州 Xai-Xai でアイキャンブ |
| 4 | タンザニア眼科支援チーム | 山崎 俊 | 6/15 ~ 25 | タンザニアでの眼科支援活動 |
| 5 | ライオンズクラブ国際協会 332-C 地区・眼鏡リサイクルセンター | 山口 克宏 | ご要望に応じて随時 | リサイクル眼鏡の提供 |
| 6 | ヒマラヤ眼科医療を支援する会 | 松山 加耶子 | | |
| 7 | ファイトフォービジョン (FFV) | 藤島 浩 | 11 月 | ベトナム |
| 8 | Project Operation Sight for All (POSA) | 倉富 彰秀 | 11 月 | バングラデッシュ アイキャンブ |

日本眼科国際協力会議

会員募集

医療に携わる皆さまへ

眼科に限らず、他診療科との協力も得ながら国際医療活動に興味があり、実際に行動にうつせる方、うつしたい方募集しています。

詳しくは以下までお問い合わせください。

お問合せ

日本眼科国際医療協力会議 事務局
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-4-7
(スタッフルームタケムラ (有) 内)

URL : <http://www.jico-jp.org>

E-mail : info@jico-jp.org

TEL : 03-5287-3801

FAX : 03-5287-3802

各加入団体紹介及び活動報告

NPO 法人 アジア眼科医療協力会 Association for Ophthalmic Cooperation in Asia (AOCA)



代表者：黒田 真一郎

アジア眼科医療協力会（AOCA）は、1972年から47年に亘って、ネパール、インドを中心として、アジアの国々に対して眼科医療の面でさまざまな援助を行っている NGO です。当会はアイキャンプ、人材育成、新医療技術と医療機器の導入、などの活動を行ってまいりましたが、現在は主としてアイキャンプ活動に力を注いでいます。

アイキャンプとは、眼科医療施設のない地域に眼科医療チームを派遣して、失明者・視力低下者に対する白内障手術を主とした眼科医療支援活動です。日本からの派遣チームは、ネパールで38回（68か所）、インドのダラムサラで19回、2018年度には南インドのバイラクuppeにて第1回アイキャンプを挙行し、総計1万1千件を超える手術を行い、白内障による失明者を救いました。人材面では、眼科医、器械修理技師、看護師など、延べ34人のネパール人に日本やインドでの研修支援をしてきました。

また1988年から18年間、24時間テレビと協働し、「ナラヤニアイケアプロジェクト」を展開。ネパール南部にあるケディア眼科病院を支援し、新たにゴール眼科病院を開設支援してきました。そして、これらの病院に日本人医師やスタッフの長期派遣を行い、現在は2つの病院ともほぼ経済的に自立を果たしており、両病院合わせて年間約4万件の白内障手術が行われ、失明防止の拠点となっています。

2007年から3年間、国際協力機構（JICA）と連携し、ネパール全土を対象に「眼科医療システム強化プロジェクト」を実施しました。眼科医、眼科助手、ヘルスポストスタッフ（医療師）への教育を通して、草の根の人々に眼科医療がいきわたるシステム構築を進めました。（活動の詳細はホームページをご覧ください。URL <http://www.aoca.jp/>）

AOCAの活動にご理解、ご協力いただいた個人・団体・各企業の皆様に深く感謝致します。



アイキャンプの地ダラムサラ



バイラクuppeアイキャンプの行われた Tso Jhe Khangsar Charity Hospital 病院

1. 2018年活動報告（年次報告）

■インド ダラムサラ・アイキャンプ

2018年12月22日～31日、インド北西部に位置するダラムサラで19回目の眼科医療支援活動（アイキャンプ）を行いました。ダラムサラは、ダライ・ラマ14世およびチベット難民が居住する、インドの中でも特殊な背景のある地域です。周囲には貧困層のインド人も居住しています。アジア眼科医療協力会は、チベット亡命政府管轄の小規模なDelek病院に眼科医3名を含む医療チームを派遣しました。アイキャンプ初日には白内障手術前スクリーニングを主目的とした外来診療を行い、インド人及びチベット人約240名を診察しました。外来診療を通じて、近隣のインド州立病院勤務のインド人眼科医と同じ所見を共有し、診察指導も行いました。白内障手術適応患者には、眼軸長測定及び角膜曲率半径測定を行い、適切な人工眼内レンズ度数を決定しました。アイキャンプ2～4日目の3日間で73名に白内障手術（水晶体嚢外摘出術）を、4名に翼状片手術を施行しました。手術3週後の経過は皆良好であると、インド人眼科医から報告を受けています。

現地のインド人眼科医への技術指導も継続して行えたことは、今後の現地の眼科医療向上に貢献すると思われまます。現地の日本人に対する信頼は厚く、Delek病院院長とインド人眼科医を交えたアイキャンプ後のミーティングでは、継続した活動を熱望されました。



アイキャンプメンバー



手術風景

■インド バイラクッペ・アイキャンプ

2018年12月23日～30日、インド南部のカルナタカ州にあるバイラクッペにて第1回アイキャンプを行いました。バイラクッペには8つのチベット寺院があり、約1万3000人の亡命チベット難民が暮らしている保護区です。

当会はこの地において唯一の病院であるTso Jhe Khangsar Charity Hospitalに、眼科医5名、看護師1名、通訳兼コーディネーター1名の医療チームを派遣しました。

アイキャンプ初日には約250名の外来診療を行い、そのうち約9割がチベット人でした。白内障手術適応患者には、測定した眼軸長測定を元に適切な眼内レンズ度数を決定し、16名に白内障手術を施行しました。また4名の翼状片患者に摘出手術を行いました。

バイラクッペでの初めてのアイキャンプは、インド人眼科医ならびにチベット人の病院長、眼科助手やスタッフなどの協力のもと成功裏に終えることができました。引き続きこのプロジェクトは継続していく計画です。



顕微鏡のライトが
消えた中での手術



バイラクッペアイキャンプのメンバーとカウンターパートのメンバー

NPO 法人 アジア失明予防の会

Asia Prevention of Blindness Association (APBA)

代表者：服部 匡志

APBA の紹介

私たちアジア失明予防の会はアジア全体において失明の危機に瀕している患者を1人でも多く救えるよう、医療機器の援助、医師の派遣、医師の教育指導、治療の支援などを目的として平成15年10月1日に設立され、平成17年6月21日に京都府から認可され、特定非営利活動法人として活動しています。平成16年より、『Save The Vision』プロジェクトを開始し、ハノイやホーチミンで手術や技術指導だけでなく、より貧しい方々のためにベトナムの貧困地方に行き、ボランティアで無償の手術を実施。その数は1万8千人を超える。こうした活動は日越友好の懸け橋となっており、15年間にわたる献身的な活動が評価され、平成26年12月に服部医師に対してベトナム政府より外国人最高位となる「友好勲章」が授与された。



2018年活動報告

今年度の医療技術指導は、ベトナムではハノイにて日本国際眼科病院での教育・指導を行い、ハノイ以外ではベトナム中部域の医療拠点となるフエ眼科病院での網膜硝子体手術の技術指導や教育を重点的に行った。また、地方での無償白内障手術プロジェクトを通じて、若手医師を育成するとともに、地方の医師への白内障手術の技術移転を行っている。ベトナム以外においては、ラオスやミャンマーにおいて手術をするだけでなく、技術移転するために内視鏡を用いて手術を積極的に行い若手医師の指導をおこなった結果、ラオスでもミャンマーでも網膜剥離や簡単な糖尿病網膜症出血などの手術などは現地の医師がおこなえるようになった。また木下医師を中心にタイのチュラロンコーン大学との交流を深めるなど、アジア諸国との交流や医師の育成に力を入れている。

治療支援事業は、ほぼ毎月各地方において無償の白内障手術と網膜硝子体手術を行い、今年度も約1200名以上の患者さんに無償治療を実施した。2018年1月下旬にミャンマーでのプロジェクト中にスリップして服部医師が脊椎損傷し2月に緊急手術を行い、1か月間の入院を余儀なくされたため2月はプロジェクトが行えなかった。リハビリの甲斐もありその後の3～4月のプロジェクトは順調に実施されたが、再び腰部疼痛のため4月～5月初旬にかけて2週間入院。5月、6月、7月はプロジェクトに復帰し順調に行われた。今年度においても、現地の人民委員会および医療保健局等などの連絡調整がうまく行きプロジェクト実施において全く問題は発生しなかった。一方、ボランティアの参加者は日本人、ベトナム人を問わず申し出が増えており、医療に関係のない人達の受け入れも積極的に行っている。毎年参加している大阪府立四條畷高校や大阪国際滝井高校および姉妹校の大和田高校の生徒や、鹿児島大学の医学生や山口大学の医学生らがボランティアに参加。また、毎年のボランティア参加がきっかけで大阪国際滝井高校の修学旅行先がハノイになったことは非常に興味深い。引き続き彼らの安全確保などにも注意を怠らないようにプロジェクトを無事



に実施していく。物資支援面では、日本政府の草の根支援無償をお願いし、Quang Ninh 省全体の眼科医療サービスの向上のために機材支援が行われた。アジア失明予防の会として、とても小さな草の根の機材支援であるが、なかなか医療機器が行き届かない地方病院に対して、非常に有用となる医療資機材などの寄贈を積極的におこなった。ベトナム国立眼科病院の眼内内視鏡も破損し修理不可となったために 1 台寄贈し、顕微鏡はハイフォン眼科病院と Quang Ninh 省のアイセンターに各 1 台寄贈した。また、ラオスのビエンチャン国立眼科病院へはスリットランプの寄贈を行った。

また、5 月末にベトナム国家主席が国賓として来日した折には、両天皇陛下が開催された宮中晩餐会へ服部医師が招待を受けるなどますます活動への支援の輪が広がっている。

| 年 | 月 | 活動場所や活動記録 | 手術数 | 派遣医師・看護師・ボランティア参加者など |
|---|----|---|---|---|
| 2017 | 10 | Hue 市 フェ眼科病院 | 35 人 | 服部医師、Hoai さん。白内障手術。網膜硝子体手術および指導。 |
| | | Quang Ninh 省 Quang Yen 地方総合病院 | 126 人 | 服部医師、Duc 医師、DucGa 医師、Ching 医師、Thu 看護師、Hoa 看護師、Thiem さん |
| | 11 | ラオスのヴィエンチャン国立眼科病院 | 15 人 | 服部医師、丹羽医師。300 万円相当の医療資機材の寄贈と白内障手術と網膜硝子体手術およびその指導。 |
| | | Ninh Thuan 省 Ninh Thuan 眼科病院 | 100 人 | 服部医師、Duc 医師、DucGa 医師、Ching 医師、Thu 看護師、Hoa 看護師 |
| | 12 | Hue 市 フェ眼科病院 | 40 人 | 服部医師、Hoai さん。白内障手術。網膜硝子体手術および指導。 |
| | | Quang Ninh 省 Quang Yen 地方総合病院 | 140 人 | 服部医師、Duc 医師、DucGa 医師、Ching 医師、Thuy 看護師、Hoang 看護師 |
| | | Hai Phong 市 ハイフォン眼科病院 | 20 人 | 服部医師、Hoai さん（手術用顕微鏡を寄贈） |
| Dac Lak 省総合病院 | | 150 人 | 服部医師、Hung 医師、Duc 医師、DucGa 医師、Ching 医師、Thu 看護師、Hoa 看護師 | |
| 2018 | 1 | ミャンマーのヤンゴン国立眼科病院、マ ンダレーのマンダラー眼科クリニック | 10 人 | 服部医師、篠田さん（ロート製薬）。白内障手術。網膜硝子体手術および指導 |
| | 2 | ミャンマーに行き、プロジェクト中に足を滑らせ脊椎を損傷し、緊急手術を受け、1 か月入院したために 2 月に予定していたプロジェクトは中止。 | | |
| | 3 | ミャンマーのヤンゴン国立眼科病院、マ ンダレーのマンダラー眼科クリニック | 20 人 | 服部医師、篠田さん（ロート製薬）。白内障手術。網膜硝子体手術および指導。 |
| | | Quang Ninh 省 Cam Pha 地方総合病院 | 150 人 | 服部医師、山崎医師（東北大）、Minh 医師、Duc 医師、DucGA 医師、Ching 医師、Thuy 看護師、Hoang 看護師、Thiem さん、日本から高校生 6 名、引率教員 2 名、山口大学・鹿児島大学の医学生 4 名がボランティアとして参加 |
| | 4 | Hue 市 フェ眼科病院 | 40 人 | 服部医師、Hoai さん。白内障手術。網膜硝子体手術および指導 |
| | 5 | Bac Kan 省 総合病院 | 105 人 | 服部医師、Dat 医師、Minh 医師、DucGa 医師、Ching 医師、Thu 看護師、Diep 記者、Thiem さん |
| | | 5 月下旬、ベトナム Quang 国家主席が国賓として来日し、天皇陛下が宮中晩餐会を開催し、そこに服部医師が招待され、両陛下より、服部医師の長年にわたる献身的な活動を高く賞賛。また Quang 国家主席からも謝意を伝えられ、この活動を続けていただきたいと懇願される。 | | |
| | 6 | Hue 市 フェ眼科病院 | 40 人 | 服部医師、Hoai さん。白内障手術と網膜硝子体手術およびその指導 |
| | | Quang Ninh 省 Tien Yen 地方総合病院 | 100 人 | 服部医師、Duc 医師、Quy 医師、DucGa 医師、Ching 医師、Thuy 看護師、Hoang 看護師、Diep 記者、Thiem さん |
| | 8 | Quang Ninh 省 モンカイ地方総合病院 | 150 人 | 服部医師、Duc 医師、DucGa 医師、Ching 医師、Thu 看護師、Thiem さん、山口大学の医学生 4 名がボランティアとして参加 |
| ミャンマーのヤンゴン国立眼科病院、マ ンダレーのマンダラー眼科クリニック | | 25 人 | 服部医師、サンダーさん（ロート製薬）、篠田さん（ロート製薬）。白内障手術、網膜硝子体手術および指導 | |

アフリカ眼科医療を支援する会

Association for Ophthalmic Support in Africa (AOSA)

<http://aosa-eye.org>



代表：内藤 毅（徳島大学）

発足の経緯

- ・2006年8月、モザンビーク共和国（以下モザンビーク）駐日大使と面談し、医療協力を要請される。人口約2千万人のモザンビークには、眼科医13人がしかいないことを知る。
- ・2007年8月、モザンビークを視察し、活動計画を立案した。
- ・2008年4月、アフリカ眼科医療を支援する会 Association for Ophthalmic Support in Africa（AOSA）を設立した。

活動目的

- ・モザンビークにおける眼科医療水準の向上
- ・白内障による失明患者の治療
- ・アフリカの眼科医の教育

活動内容

- ・2008年6月、モザンビーク保健省の要請によりモザンビーク北部の僻地（Cabo Delgado, Mueda）で、第1回目のアイキャンプを実施し、47人（48眼）の白内障手術を行った。2009年8月、同じく Mueda で、第2回アイキャンプを行い、58人の白内障手術をおこなった。
- ・2010年の第3回から2015年まで Cabo Delgado 州 Pemba で毎年アイキャンプを行った。
- ・2016年は Gaza 州 Xai-Xai でアイキャンプを行った。
- ・2017年は再び Cabo Delgado 州 Pemba でアイキャンプを行った。
- ・現在までに合計1,630人の白内障手術を行った。



集まった大勢の患者さんたち



白内障手術技術指導

2018年 AOSA 活動報告

- ・2018年6月5日(出国)～15日(帰国)の日程で、モザンビーク南部の Gaza 州 Xai-Xai にて第11回アイキャンプを行った。Xai-Xai の病院には我々が育成してきた眼科医1名が赴任している。
- ・医師4名、看護師1名、視能訓練士1名、現地コーディネーター1名、青年海外協力隊員4名の合計11名の日本人スタッフとモザンビーク人眼科医3名、眼科助手1名が加わった。
- ・患者診察および白内障手術を行った。
- ・手術患者数は合計220人で、全ての患者さんに眼内レンズを挿入することが出来た。術後経過も概ね良好で、術後眼内炎などの重篤な合併症はなかった。
- ・モザンビーク人眼科医は AOSA が招待し、旅費等を支給した。また、白内障手術の技術指導を行い、相互理解を深めた。



アイキャンプ終了時の記念写真

NPO 法人 タンザニア眼科支援チーム

Japan Tanzania Eye Medical Support Team

代表者：山崎 俊（愛知県、山崎眼科院長）

私たち「タンザニア眼科支援チーム」は2007年よりアフリカ、タンザニア連合共和国の国立ムヒンビリ大学病院で眼科支援活動を行っております。

活動開始の契機は、徳島県藤田眼科の藤田善史先生を中心として行われている「ミャンマー眼科支援活動」に参加していた山崎が、2006年に当時の駐日タンザニア大使であるムタンゴ氏と面会し「同じような活動がタンザニアでも出来ないか？」と相談を受けたことです。

タンザニアはアフリカ東部、赤道の南に位置し、面積約95万km²（日本の約2.5倍）人口約4300万人（日本の約半分）アフリカ最高峰のキリマンジャロ山とそのふもとで栽培されるコーヒー、そしてライオン、ゾウ、シマウマなどの野生動物が有名です。眼科医数はわずか30人程度、眼科医療は資金不足などから大学病院でも十分な治療が行えない状況で、適切な支援が必要と考えられます。

チームのメンバーは、岐阜県ほりお眼科院長の堀尾直市先生、愛知県小嶋病院眼科の小嶋義久先生らを中心とした日本人眼科医と眼科医療関係者で構成されています。現地ではタンザニア在住で日本大使館に勤務している横江美貴看護師が、我々の活動をコーディネートしてくれています。

更にはタンザニア保健省、外務省、駐日タンザニア大使館、在タンザニア日本大使館、そして2005年の愛知万博でフレンドシップ提携を交わした愛知県小牧市と、小牧ライオンズクラブをはじめとする多くの皆様にご協力をいただいております。

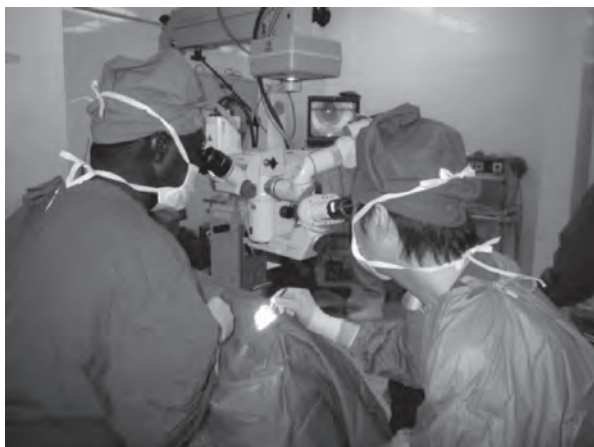
具体的な活動内容は以下の3項目で、ミャンマー眼科支援活動をお手本にしています。

- 1) 年1回1週間程度現地を訪問して超音波白内障手術の技術指導を中心とした支援活動を行う。
- 2) 現地眼科医らと連絡を取りながら不足している機器、薬剤などを出来る範囲で提供し、これらの管理指導を行う。
- 3) タンザニア眼科医を日本に招いて研修をしてもらう。

活動回数を重ねるごとに現地眼科関係者との信頼関係が深くなることを実感しますが、同時に生活や医療の環境が異なる者たちが相互理解をする難しさも感じています。

私たちはタンザニアの眼科関係者との交流を通じて、現地の眼科医療の発展を支援すると共に、この経験を通して我々自身が成長していくことも重要であると考えております。

NPO 法人タンザニア眼科支援チーム、ホームページ <http://www.jtemst.com/>



堀尾先生による手術指導（2009）



眼科機器寄贈式典（2008）

2018年 活動報告

タンザニア眼科支援チームは2018年5月28日から6月2日まで、第14回目となる現地での支援活動を行いました。今回は小嶋義久先生（小嶋記念病院副院長）、浅見哲先生（眼科三宅病院副院長）らが中心となって、以下の5項目の活動をすすめました。

- 1) 検眼セット、点眼薬などの眼科薬剤、メスなどの消耗品を寄贈（合計金額約1000万円相当）
- 2) 日本人眼科医による講義3題
（山崎医師：How to improve phaco surgery、小嶋医師：Some Points of PEA、浅見医師：The importance of disinfection in cataract surgery）
- 3) 医療機器のメンテナンス、寄贈機器のセットアップと使用および管理指導、これまでに寄贈してきた眼科医療機器の修理点検、管理指導など（竹内護氏、竹内建司氏ら）
- 4) 超音波白内障手術の模範手術公開、現地眼科医への手術指導（小嶋医師、浅見医師）
- 5) 眼科医がいない郊外の診療所での眼科健診

今年も昨年同様5～6月に現地を訪問しました。この時期は比較的若い医師たちが大学で研修をしており、講義や実地指導の場で以前よりも活発で熱心な質疑応答がみられました。若い眼科医たちが積極的に超音波白内障手術の普及に関心を示していることは大きな手ごたえだと感じています。今回も現地のテレビ、新聞社より取材があり広く報道されました。また、昨年に続いて眼科医がいない郊外の診療所での眼科健診を行いました。その他にも、在タンザニア日本大使館の吉田大使よりご招待をいただいた大使公邸での食事会、サファリ観光など盛りだくさんの内容でした。

活動回数を重ねるごとに現地関係者との信頼が深くなることを実感しますが、環境の違いによる相互理解の難しさも感じます。これからも我々の活動が微力ながらもタンザニアの眼科医療発展のために協力できればより良いと考えております。

（報告者、山崎俊 GEG05212@nifty.com）



現地での新聞報道



オペ室にて



大使公邸での食事会

Fight for Vision 2018 in Vietnam

矢津 啓之¹²³・清水 映輔²

1：NPO 法人 Fight For Vision

2：慶應義塾大学医学部眼科学教室

3：鶴見大学歯学部付属病院 眼科

2018年12月27日から30日にかけて、特定非営利活動法人 Fight for Vision (FFV) の活動の一環で、矢津啓之・清水映輔の2名が、ベトナムのホーチミンから車で3時間の Binh Phuoc 省 Binh Long 総合病院にて国際医療協力に従事した。滞在期間中は晴天に恵まれ、気温も最高30度まで上昇し、蒸し暑い気候であった。今回の日本人参加者は我々と、特定非営利活動法人アジア失明予防の会所属の服部匡志医師の3名のみであった。

初日はハノイに宿泊後、服部医師・ベトナム人眼科医・スタッフと合流し、医療資材の運搬から参加させていただいた。ハノイからホーチミンに飛行機で移動後、救急車でさらに3時間かけて今回の医療支援を行う病院に到着した。2日間泊まり込みで計70名の白内障手術（超音波水晶体乳化吸引術、水晶体嚢外摘出術、前部硝子体切除術、眼内レンズ縫着術）を、7名の医師で執刀した。服部医師は白内障手術はもちろん、合併症例の repair も執刀されていた。患者年齢は50歳から90歳で、女性の割合が多く、ほとんどの症例が核硬化度の高い白内障・成熟白内障・角膜混濁・チン小帯脆弱など、とにかく何かしらの合併症を有



ボランティア手術中

主に白内障手術（超音波乳化吸引術、眼内レンズ縫着術）、角膜縫合を執刀（左から1人目：服部医師、2人目：清水医師、3人目：矢津医師）。

する症例であった。昨年と同様、現地の顕微鏡や手術器具は日本の有志より寄付された旧式の機器を使用しており、 Disposable な手術用品も少なく、日本語も英語も通じない普段とは異なった条件での執刀であったため、最初は難渋したが、現地の医師とともに我々 FFV 医師も大きなトラブルなく終えることができた。自分の執刀以外の時間は、他医師の手術の助手や外回り（眼内レンズの選択、患者さんの前眼部から眼底の診察など）をさせていただいた。やはり今年も、現地のベトナム人医師による無縫合水晶体嚢外摘出の技術力には感銘を受けた。

翌日の術後診察では、まず眼内レンズの位置・角膜浮腫の有無・瞳孔形状などを、ペンライトやスマートフォンのライトで照らしながら肉眼で観察した。異常を認めれば現地に 1 台のみある細隙灯顕微鏡を用いて再度診察を行い、点滴や再手術などの治療方針を議論した。医師患者間の信頼関係が強固で、とても雰囲気の良い回診であった。また現地では、医師・看護師・コメディカルスタッフ全員で患者の治療にあたり、準備から後片付けまで、総員で協力して行う姿が大変印象的であった。

現地では毎日美味しいベトナム料理をご馳走になり、宿泊場所も提供していただき、最高の健康状態で手術に専念することができた。年末でもあり、早く帰国を余儀なくされた一行であったが、いかに日本での診療が恵まれているものであるか気付かされる貴重な体験であった。

最後に、歓迎して下さった現地の医師・スタッフの方々、技術面だけでなくコメディカルや患者さんとの接し方まで指導して下さった服部先生、物資の支援をして下さった協賛企業（術前の散瞳剤点眼液・術後の抗生剤点眼液はそれぞれ参天製薬・千寿製薬株式会社から、白内障手術機械は AMO 社からの提供）、そして FFV 関係者に心より感謝の意を表したい。



術後回診

術前核硬度 5 度の白内障で、ほぼ光覚弁の患者さんが、術後明るくなくなり見えるようになったと喜んでいる様子。我々もこの笑顔に救われた。



交流写真

現地の病院関係者、服部医師、FFV 医師による交流の写真（後列：左から 1 人目：清水医師、2 人目：矢津医師、4 人目：服部医師）。

NPO 法人 Project Operation Sight For All (POSA)

Project Operation Sight For All (POSA)

代表者：倉富 彰秀

URL: <http://www.posaoffice.net/>

世界各地にはその経済的事情から、光のない生活を強いられている人々が大勢いることを知り、1995年にアイキャンプという形でインドの北東部に於て現地眼科医と共同で個人的に主に白内障手術による眼科医療援助活動を開始しました。しかし、個人の力には限界があると認識し、より効果的な活動を目指す為1999年に POSA を設立し、同年に NPO 法人（特定非営利活動法人）POSA として認定されました。2000年より活動地をバングラデシュへと移し NPO 法人国際エンゼル協会を現地パートナーとして活動を続けております。

POSA とは、Project Operation Sight for All（すべての人々のための視覚手術計画）の略で、その中の「for All」は、インドやバングラデシュの人々のみならず、全世界の人々のためという意味を含め、命名致しました。

眼科衛生学に関する知識の普及および白内障・緑内障に対する研究、またその貧しさ故に適切な医療を受けられない人々に対するボランティア医療活動を行い、その視力回復による社会復帰と自立を促すことを通して国際交流に貢献することを目的としています。

POSA では、ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST（分かちあわれない全てのものは、失われる）をモットーに掲げ、眼科医療援助活動のポリシーとして、次の2点を示しております。

- ①医師として患者様にとって最善の治療を最高の医療レベルで行う。
- ②白内障のために失明しており、しかも経済的な理由から今後白内障手術を受ける機会がないと予想される患者様を対象とする。

我々はこの団体の元でより多くの人々が分厚い眼鏡なしでも、良好な視力を得られるように白内障手術（100%眼内レンズ挿入）を続けてまいりたいと思っております。

次年度の（2019年）眼科医療援助について

バングラデシュで2016年7月 ISIL (Islamic State in Iraq and the Levant) による外国人襲撃事件で日本人8名が死傷したテロ事件が発生しました。現地の受け入れ先であるエンゼル協会からその年の眼科医療援助は取りやめたほうがよいとのご忠告をいただきました。POSA としましても目立った行動は控えるべきと判断し、日本からの医師、看護師、視能訓練士、学生等の参加を見合わせていましたが、2019年度は、日本からの医師、看護師、視能訓練士、学生等の参加で11月にアイキャンプを再開する予定です。

第1回～第24回の白内障手術数

| | 年 度 | 西暦 | 実施場所 | 手術数 | | 年 度 | 西暦 | 実施場所 | 手術数 |
|------|----------|------|---------|-----|------|----------|------|---------|-------|
| 第1回 | 平成7年2月 | 1995 | インド | 37 | 第14回 | 平成19年12月 | 2007 | バングラデシュ | 73 |
| 第2回 | 平成7年12月 | 1995 | インド | 99 | 第15回 | 平成20年12月 | 2008 | バングラデシュ | 63 |
| 第3回 | 平成8年12月 | 1996 | インド | 125 | 第16回 | 平成21年12月 | 2009 | バングラデシュ | 88 |
| 第4回 | 平成9年12月 | 1997 | インド | 184 | 第17回 | 平成22年12月 | 2010 | バングラデシュ | 102 |
| 第5回 | 平成10年12月 | 1998 | インド | 184 | 第18回 | 平成23年12月 | 2011 | バングラデシュ | 105 |
| 第6回 | 平成11年12月 | 1999 | インド | 127 | 第19回 | 平成24年12月 | 2012 | バングラデシュ | 107 |
| 第7回 | 平成12年12月 | 2000 | バングラデシュ | — | 第20回 | 平成25年12月 | 2013 | バングラデシュ | 103 |
| 第8回 | 平成13年12月 | 2001 | バングラデシュ | 13 | 第21回 | 平成26年2月 | 2014 | バングラデシュ | 123 |
| 第9回 | 平成14年12月 | 2002 | バングラデシュ | 55 | 第22回 | 平成29年2月 | 2017 | バングラデシュ | 55 |
| 第10回 | 平成15年12月 | 2003 | バングラデシュ | 86 | 第23回 | 平成30年2月 | 2018 | バングラデシュ | 82 |
| 第11回 | 平成16年12月 | 2004 | バングラデシュ | 81 | 第24回 | 平成30年11月 | 2018 | バングラデシュ | 40 |
| 第12回 | 平成17年12月 | 2005 | バングラデシュ | 61 | | | | | |
| 第13回 | 平成18年12月 | 2006 | バングラデシュ | 75 | | | | 合 計 | 2,068 |



現地眼科医による術前の診察



スクリーニングを待つ人たち



村々からライオンズ眼科病院への送迎



スクリーニングを待つ人たち

ライオンズクラブ国際協会 332-C 地区・ 眼鏡リサイクルセンター

仙台市・大橋眼科医院 院長 山口克宏

日本におけるライオンズ眼鏡リサイクル事業の創生について

■視覚障害の現状

視覚障害は、一般に「失明（盲）：blindness」と「低視力：lowvision」に大別されます。WHO 基準によれば、「失明」は全盲（光覚なし）のみを指すのではなく、「良い方の眼の視力」で 0.05 未満に用いられ、「低視力」は良い方の眼の視力で 0.05～0.3 未満と定義されています。また、「良い方の眼の視力」の定義は、従来の最高矯正視力ではなく、日常的に使用している眼鏡やコンタクトレンズによる屈折矯正下での視力、すなわち「現視力」という定義が使われるようになってきています。

最新の検討では、2015 年時点の世界の視覚障害者数は、失明者は 3,600 万人、低視力者は 2 億 1,660 万人の合計 2 億 5,260 万人であり、過去 25 年間の世界における視覚障害対策の成果により、視覚障害者数とその人口割合は減少してきたとされております。しかし、今後は、世界的な死亡率の低下に伴う平均寿命の延伸により、視覚障害者数は今後数十年で急増し、2050 年には失明者は現在の 3 倍の 1 億 1,460 万人に、低視力者は 2.5 倍の 5 億 5,000 万人に増えると予測されております。

現在、全世界における失明と低視力のそれぞれの有病割合は 0.5%と 3.0%であり、視覚障害は高齢者と女性に多いとされております。視覚障害の原因疾患は、トラコーマやオンコセルカ症などの感染症は、過去 25 年間で大幅に減少し、現在世界における低視力の最大の原因は、未矯正の屈折異常であり全体の 52%を占めていると報告されております。続いて、白内障 25%、加齢黄斑変性 4%、緑内障 2%、糖尿病網膜症 1%が低視力の原因となっています。一方、失明の最大原因はいまだ白内障であり 35%を占め、未矯正の屈折異常 20%、緑内障 8%が続いています。視覚障害全体では、未矯正の屈折異常と白内障の両方で全体の 3/4 を占め、屈折矯正や白内障手術などの対策により克服できる課題が、未解決のまま残されている現状が続いております（平塚義宗 日眼会誌 122 (7): 537-545, 2018）。

■世界のライオンズ・アイグラスリサイクリングセンター

発展途上国において眼鏡を必要とする人々を支援するため、不要となった眼鏡を収集する眼鏡のリサイクル事業は、世界的奉仕団体であるライオンズクラブの代表的な活動となっております。収集された中古眼鏡は、再利用化され、眼鏡が無く困窮している地域に送られます。回収された眼鏡を再生する施設であるアイグラスリサイクリングセンターは、アメリカ 12 か所、カナダ、フランス、イタリア、オーストラリア、スペイン、南アフリカにそれぞれ 1 か所あります。集められた眼鏡は、再使用できるように屈折度の計測がなされ、人道的配布チームにより発展途上国の受給者に送付されています。しかし、リサイクル眼鏡が支給を希望するすべての人に届けられ、視力障害による生活困窮者を救うまでには至っておらず、更なるリサイクル事業の拡大が望まれております。

一方で、ライオンズ・アイグラスリサイクリングセンターは、これまでは日本のみならずアジア地区に 1 か所も存在していませんでした。日本各地のライオンズクラブが眼鏡を収集し、集められた眼鏡は海外のアイグラスリサイクリングセンターに送られ、その先の社会奉仕を海外のセンターに委ねているのが実情となっております。日本から送り出されたリサイクル用眼鏡が、どのように役立っていたのかを知ることは出来ませんでした。ライオンズクラブ国際協会 332-C 地区は、この欠落を改善していくことを考え、地区の事業として眼鏡リサイクルセンターを平成 29 年に立ち上げました。

■332-C 地区・眼鏡リサイクルセンター

本邦においては、障害者就労支援事業所が、雇用契約に基づく就職が困難な障害者方々に就労の機会を提供するために、就労継続支援の目的に適した収益性のある事業の創出を求めています。障害者就労には、労働基準法や最低賃金法等の労働法規は適用されず、所得保障は二次となりがちで、障害者の福祉的就労の平均月額賃金は低水準の状況にあります。したがって、日本国内の中古眼鏡を再利用化する作業を、より高い作業賃金と共に就労支援事業所に依頼することは有益な就労支援となると考えられます。すなわち、各ライオンズクラブが回収した中古眼鏡を、障害者就労支援事業所に作業賃金の寄付と共に斡旋することは、十分に有益な奉仕事業になると考えられます。

332-C 地区眼鏡リサイクルセンターは、「福祉的就労に従事する障害者」に眼鏡リサイクル作業を依頼し（目標 A）、再利用化されたリサイクル眼鏡を、発展途上国において海外医療奉仕活動を行う医師と眼鏡を必要とする患者（目標 B）、屈折障害を持つ生徒達（目標 C）に向けて発送することを目的として活動しております。すなわち、「就労支援事業所に効率の良い仕事をもたらす」と同時に「リサイクル眼鏡の提供により発展途上国における視覚障害者を低減させる」ことに寄与することを最大の目標としています。

2017～2018年度の活動

目標 A：障害者就労支援事業所への援助

3台のレンズチェッカーを仙台市内の就労支援事業所に提供し、その使用方法について指導を行いました。回収された眼鏡から不良品を除外し、専用に購入した食洗機を利用して眼鏡の洗浄を行い、レンズチェッカーにより眼鏡の屈折度を測定し、検査結果の用紙と共に眼鏡が見えるようにビニール袋に梱包する一連の作業を実践しました。事業所の就労者は、最初は不慣れでしたが、しだいに作業効率が向上しました。最終的には、海外発送向けの段ボール箱への梱包についても自前で出来るようになりました。

目標 B：海外へのリサイクル眼鏡の提供

日本眼科国際医療協力会議のメンバーである以下のNPO法人にリサイクル奉仕用眼鏡を提供し、白内障手術後の矯正治療に利用していただきました。

1. ファイトフォービジョン（代表：藤島浩医師）ベトナム眼科医療活動
2. NPO アジア失明予防の会（代表：服部匡志医師）ベトナム眼科医療活動
3. タンザニア眼科支援チーム（代表：山崎俊医師）タンザニア眼科医療活動
4. POSA：Project Operation Sight for All（代表：倉富彰秀医師）

また、徳島市の藤田善史医師から、NPO法人 日本ミャンマー交流協会をご紹介いただき、ヤンゴン第一医科大学所管のヤンゴン眼科病院の主任教授ティン・ウィン医師に眼鏡リサイクルセンターから奉仕用眼鏡を発送しました。ヤンゴン眼科病院は、ミャンマー各地にサテライトの眼科病院を展開しており、へき地においてははまだ屈折矯正用の眼鏡が不足しており、今後も定期的に奉仕用眼鏡を発送していく予定です。

目標 C：

屈折障害を持つ生徒達へのリサイクル奉仕用眼鏡の提供は、山形蔵王ライオンズクラブの協力により実現しました。新モンゴル学園は、ジャンチブ・ガルバドラッハ理事長により、2000年にモンゴル初の日本式高等学校が設立され、その後小中学校、さらに2014年に設立された「新モンゴル工科大学」「新モンゴル高等専門学校」を傘下におく、モンゴル国ウランバートル市にある学校法人です。今回は、株式会社 JINS 社からご寄贈いただいたサングラスと合わせて約 11,000 個もの眼鏡を贈ることができました。ジャンチブ・ガルバドラッハ理事長が、各所から寄贈された奉仕用物品を山形市に受け取りに来られるのに合わせて、JINS 社および 332-C 地区眼鏡リサイクルセンターから、受け取り場所としてご協力をいただいたヤマザワ薬品物流倉庫に発送し、平成 30 年 7 月 17 日に現地にて山形蔵王ライオンズクラブの方にお渡しいただくというリレー方式で寄贈が行われました。今後、学園の関係する奉仕チームにきちんと利用していただくこととなります。

以上のリサイクル奉仕活動用眼鏡を寄贈する活動が、発展途上国の眼科医療をサポートし、視覚障害者を低減させることに寄与することができれば、大変喜ばしいことと考えております。今後も、日本国内で収集されたりサイクル眼鏡を、発展途上国にて屈折異常で困っている方々にお使いいただき、各国の眼科医療水準の向上に少しでもお役に立ちたいと考えているところです。

今後に向けて

1. リサイクル眼鏡の回収促進

事業を開始してまだ 1 年ほどではありますが、日本国内のライオンズクラブから多くのリサイクル眼鏡の寄贈をいただいております。

これまで、眼鏡をご寄贈くださいました地区およびクラブは以下の通りです。

331-A、330-B、331-C、332-A、332-F、330-C、335-C2R2Z、335-C2R2Z、335-C2R2Z、337-C、331-B、仙台いずみ LC、北上 LC、滝川中央 LC、札幌アカシア LC、静岡芙蓉 LC、札幌コスミックシニア LC、札幌南 LC、札幌白石 LC、江別 LC、津山衆楽 LC、岩見沢 LC、菊川 LC、藤沢 LC、332-C 地区年次大会、藤沢ライフ LC、江別グリーン LC、札幌グリーン LC、仙台東、菰野 LC、札幌大通 LC、大垣水都 LC、札幌ライラック LC、東京三軒茶屋 LC、玉村町 LC、仙台広瀬 LC、東北福祉大学 LC、東北福祉大学レオクラブ

ご協力に感謝申し上げます。

2. 受け取り手の開拓

本事業は、受け取り手があってはじめて成り立ちます。本事業の発展のために、

リサイクル奉仕活動用眼鏡の受け取り手として、望ましい団体を是非ご紹介いただきたいと思います。特に、貧困や医療システムの不備により眼科医療や診察を十分に受けられない国で眼科治療と手術を提供している団体や、教育支援に携わっている団体が最も適切と考えております。回収と寄贈の好循環により、これまで海外に頼っていた眼鏡リサイクル事業を日本さらに言えばアジア主体の事業となるまでに伸ばして行くことが目標です。

海外との連携により培われましたルートがございましたら連絡先をお教えいただき、受け取り手の開拓にご助力をいただきたく、宜しくお願い申し上げます。

文責 332-C 地区・眼鏡リサイクルセンター
副委員長 山口克宏

ヒマラヤ眼科耳鼻科医療を支援する会

Eye and ENT Association For The Himalayan

理事長：三輪 加耶子



我々は、2010年よりネパールの北部を中心としてアイキャンプを行っています。メンバーは関西医科大学の医師、看護師を中心として構成されています。現地ではネパール人医師、眼科助手、看護師のグループと一緒に1年に2回、12月と3月にキャンプ地を訪問し3日間の外来、手術を行っています。

近年、大学病院が中心となっている特性を生かし、他科との合同メディカルキャンプを行っています。

参加資格としては、医療関係者、そしてボランティアの方々などやる気のある方であればどなたでもご参加可能です。

私たちは、このアイキャンプを通じて、現地の眼科医療の発展、そしてネパール、日本での他科との連携ある医療を現地で実践するとともに、日々、日本で忙しく生活している中で忘れていたこともある優しい心を思い出せるような日本人にとっても有意義な団体として活動をしたいと思っています。

医療機器無償提供のお願い

日本眼科国際医療協力会議では全国の各医療施設で使用されていない、眠っている機器のご提供をお願い致します。現在までに、日本眼科医療機器協会のご協力のもと以下の機器を必要とする発展途上国へ寄贈し有効に使用させて頂いております。

具体的にご提供を頂く前のお問い合わせでも結構でございます。事務局までお問い合わせ頂けましたら幸いに存じます。

具体的にご提供をお考えの各医療施設の皆様へ

以下のフォームに必要事項をご記入の上、事務局までいずれかの方法で送信くださいますようお願い申し上げます。

〈送信方法〉 日本眼科国際医療協力会議 事務局宛

FAX : 03-5287-3802

E-mail : jico_sec@staffroom.jp

~~~~~ 以下、ご記入お願いします ~~~~~

施設名：

\_\_\_\_\_

ご担当者名：

\_\_\_\_\_

ご連絡先：〒

TEL：

\_\_\_\_\_

E-mail：

\_\_\_\_\_

・医療機器名：

\_\_\_\_\_

・型番：

\_\_\_\_\_

・メーカー名：

\_\_\_\_\_

・製造年月日：

\_\_\_\_\_

・数量：

\_\_\_\_\_

以上をお教え頂けましたら幸いに存じます。

ご提供頂く医療機器は、当会議に加盟している団体を通じ、各団体が活動している発展途上国へ寄贈させていただきます。皆様からのご協力をお待ちしております。

【お問合せ先】

日本眼科国際医療協力会議 事務局

TEL : 03-5287-3801

FAX : 03-5287-3802

E-mail : jico\_sec@staffroom.jp

---

---

## 日本眼科国際医療協力会議へご寄付頂きました皆様、 誠にありがとうございます

坪田 一男 様                      林 篤志 様                      平野 耕治 様

(50音順)

参天製薬株式会社

---

---

### 寄付金募集要項

本国際医療協力事業計画に関わる、経費ならびに運営費は本来ならば自己資金ならびに会費で賄うべきものですが、これらだけでも限度があり、経費の相当額は諸団体及び緒会社からのご支援に頼らざるを得ませんので何卒ご協力頂けましたら幸いです。

#### 1 日本眼科国際医療協力会議代表者

理事長 藤島 浩

#### 2 寄付金の使途

日本眼科国際医療協力会議を推進する費用  
ならびに事務局運営費

#### 3 寄付金申込先

別紙協賛金申込書を下記あてへ郵送または FAX にてお送りくださいますようお願い致します。  
領収書を発行致します。

##### 日本眼科医療国際協力会議 事務局

(担当: 竹村 知佐子)

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-4-7 TEL: 03-5287-3801 FAX: 03-5287-3802

#### 4 寄付金の払込先

銀行名: 三井住友銀行  
支店: 高田馬場  
普通預金 口座番号: 4468166  
口座名義: 日本眼科国際医療協力会議

#### 5 本件に関する問合せ先

日本眼科医療国際協力会議 事務局

(担当: 竹村 知佐子)

E-mail: jico\_sec@staffroom.jp



# 寄付金申込書

日本眼科国際医療協力会議 殿

趣旨に賛同し、下記金額を日本眼科国際医療協力会議へ寄付いたします。

申込み口数 \_\_\_\_\_ 口（1口千円）

金 \_\_\_\_\_ 円也

年 月 日

所在地・ご住所

〒

貴社名/ご芳名

公印

取扱い部署

取扱い担当者

（役職）

（氏名）

（電話番号）

（Fax 番号）

（E-mail）

お振込時期

年 月 日頃

\* 本書は郵送またはFAXでご提出いただきますようお願い申し上げます。

日本眼科国際医療協力会議 事務局宛

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-4-7 TEL:03-5287-3801 FAX:03-5287-3802

寄付金のお振込先

銀行名：三井住友銀行 高田馬場支店 口座番号：普通口座 4468166

口座名義：日本眼科国際医療協力会議

または、ゆうちょ銀行に据置きの払込取扱票にてお振込みください。

ゆうちょ銀行：口座番号：00180-7-545236

加入者名義：日本眼科国際医療協力会議



# ライフスタイルを快適にする 4つの老眼対策レンズ



アクティブ

ウォーク

ホーム

クラフト

運転・旅行  
スポーツ観戦

散歩・買い物  
電車移動

料理・パソコン  
オフィスワーク

デスクトップパソコン  
模型作り、クラフトワーク

## メガネのできる健康生活    メガネドラッグ

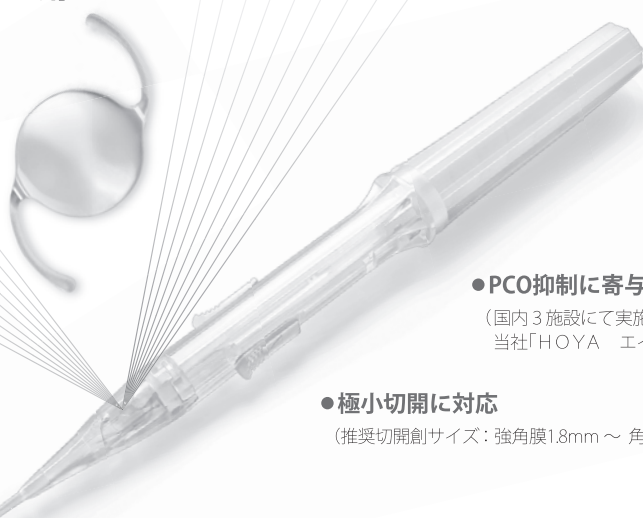
メガネドラッグ

検索

### Vivonex<sup>®</sup> iSert<sup>®</sup> Model XY1

疎水性アクリル素材「Vivonex」を用いた  
1ピース非球面眼内レンズ

極小切開対応プリロードIOL



●PCO抑制に寄与

(国内3施設にて実施した臨床試験結果：  
当社「HOYA エイエフー1 (UY)」比)

●極小切開に対応

(推奨切開創サイズ：強角膜1.8mm～角膜2.0mm～)

販売名：HOYA Vivonex アイサート

承認番号：22400BZX00498000

製造販売元：HOYA 株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-10-1

HOYA Surgical Optics

HOYA 株式会社    メディカル事業部

〒164-8545 東京都中野区中野4-10-2 中野セントラルパークサウス 6F

TEL 03-5913-2343

**HOYA**  
SURGICAL OPTICS

2017-05-10\_HSOJ\_XY1\_AD\_JP\_02

# “見える”の向こうにあるものを。

わたしたちは、世界の眼科を中心とした医療現場を見つめ、  
柔軟な発想と探究心をもって新しい薬の開発に挑み続けます。

輝く瞳、広がる笑顔、幸せを感じる毎日。

そんな“見える”の向こうにあるものをカタチづくっていく会社。

それが、千寿製薬です。





# Alcon

## We Help People See Brilliantly.

### 人々に、素晴らしい視界を

私たちアルコンは、素晴らしい視界がもたらす素晴らしい人生に貢献するために、人生が変わるような眼科製品のイノベーションで世界のリーダーを目指します。

アルコンは、患者様に最善の治療結果がもたらされるよう、最も幅広い眼科サージカル製品群と、技術力の高いコンタクトレンズやレンズケア製品群を取り揃えています。これらの製品は、白内障、網膜疾患、屈折異常といった眼疾患に悩む多くの方々の治療に役立てられています。

私たちは視界という贈り物を世界中のより多くの方々にお届けするため、アイケア専門家とのパートナーシップにより、最先端のイノベーションを生み出してきました。これが、アルコンが70年以上にわたって受け継いできた財産であり、アルコンが明るい未来を築いていくための道しるべとなります。

[www.alcon.co.jp](http://www.alcon.co.jp)

